時間の観念を見直す（２００９・１０・１４）

先月後半、カナダの先住民族イヌイットの人々が生活している地域を訪問し、アザラシやイッカクの狩猟に同行した。場所はカナダ北東地域にあるヌナブト準州のポンド・インレットという人口二〇〇〇人弱の集落である。首都オタワから三〇〇〇キロメートル北上した北緯七三度近くに位置し、日本からは空路でオタワなどを経由して丸二日間の長旅で到達する世界の僻地とでも表現すべき場所である。

ヌナブト準州は大半が北極圏内に位置する日本の五倍以上の面積の広大な地域であるが、人口はわずか三万五〇〇〇人強で、計算してみると北海道内に一五〇〇人弱が生活しているという過疎というより、ほとんど無人といっていい地域である。その人口の八割以上が先住民族イヌイットである。かつてはエスキモーといわれていたが、蔑称であるという理由で、現在ではイヌイットが正式の名称になっている。

そのポンド・インレットのイヌイットの老人の狩猟に同行したのだが、とまどうのは時間の観念の差異である。二泊三日の狩猟に同行の予定で、余裕をみて一週間強滞在することにしていたが、毎日、今日は強風であるなどの理由で出発しない。狩猟場所である地域までは陸沿いに小型漁船で航海するので、この程度の風速なら問題ないと想像するが、延期につぐ延期で、滞在期間ぎりぎりの夕方にようやく出発することになった。

途中から強風になった荒海を突破し、夜間には零下二〇度程になる無人の海岸にテントを設営して宿泊するという生活である。狩猟は海岸から海上を監視し、アザラシやイッカクが海面に浮上した瞬間にライフルで狙撃するのであるが、発見まで延々と待機する。今回は見聞できなかったが、冬期にはアザラシが呼吸するために浮上する氷上の小穴をひたすら監視する方法になるが、周囲は零下四〇度程になる環境である。

出発の日時の決定といい、狩猟の方法といい、忍耐の精神と表現してもいいが、都会で生活する人間からすると、時間の感覚が完全に異質なのである。人々が狩猟に出発するのは食糧が必要になったときであり、帰還するのは必要とするだけの獲物が調達できたときである。実際、同行したときは十分な頭数が捕獲できず、老人はしばらく滞在を延期し、我々だけが同僚の小型漁船で帰還できるよう手配してくれた。

帰路、州都イカルイトで環境大臣や文化大臣から、ヌナブト準州の成立の経緯や今後の計画について説明をされたが、ここにも忍耐の精神が反映されていることを実感した。この準州はカナダ政府との二〇年近い交渉の成果として誕生したが、理想とする体制を実現するため妥協しなかった結果、世界でも例外とされる領土と権限が先住民族に移管された。長期計画について質問すると、目標はあるが、達成の期限は設定していないとのことであった。

二〇世紀初頭、南洋の酋長がヨーロッパ社会を見聞したときの感想を一冊にした『パパラギ』という書籍がある。痛烈な西欧文明批判であるが、時間の観念についても「パパラギ（白人）は一日を細分した計画で粉々にし、時間が経過すると悲痛な顔色になる。これは一種の病気かもしれない」と皮肉り、時間に強迫されている文明社会を批判している。イヌイットの狩猟を見聞すると、この批判が妥当であることを実感する。

時間は人類の偉大な発明であるが、その結果、現代文明は一定時間で一定成果をもたらすことを強要され、常時、時間に追跡されている。マニフェストは従来の談合政治を転換させるのには絶大な武器であるが、それが拙速にならない保証はない。自分たちが期待する成果に到達するまで忍耐するというイヌイットの精神を参考にすることは、十分に意味のあることである。